

号外！ 次は5月に、この5人で、二日連続やります！

第14回 佐世保かっちえて落語会

扇遊・正蔵・白酒・三三・一之輔

～清く けだるく 美しかった噺家の一周忌に集まりて～

平成28年5月20日。ひとりの噺家が茶毘にふされ、あの世の客となりました。“清く けだるく 美しく”をご自身のキャッチフレーズにされていた柳家喜多八師匠です。享年66歳。

いま、この号外チラシを読んでいる人のなかには、“柳家喜多八”の名前を知らない人もいるかもしれません。いや、“落語好き”が少ない佐世保では、知らない人のほうが多いかもしれません。そういう人に、この機会にお伝えいたしますが、テレビ等で知られている、あの噺家よりも、はるかに上手くて面白くて、その“話芸”、その“表現力”、その“心根”は、落語家仲間たちから敬愛され、慕われていた素晴らしい師匠でした。落語通や落語愛好家たちも含め“落語がわかる人たち”に認められ、愛されていた、まさにプロ中のプロ。本物の噺家でした。これは私見ではなく、落語界の定説です。

私たちの会に初めて来ていただいた時も、知らないお客さまがほとんどでしたが、何度か来ていただくうちに喜多八ファンが増えていき、そうした方々から感想メールも数多くいただくようになりました。たとえば……“喜多八師匠の「親子酒」をきいているうちに、ほんとに酒の匂いを感じ、自分まで酔っているようでした”……“知らない人で初めて聞きましたが大笑いしてしまいました。こんなにうまい人がいることを知りませんでした。この人の別の落語をまた聞きたいです”……“女房にはピンとこなかったようですが「お直し」という落語を聞いて、私は心が震えました”……“喜多八さんの「らくだ」？ですか、初めて聞きました。話に引き込まれて45分だと言われてましたがほんとに集中してたんですね。せいぜい10分くらいにしか感じなかったです。こんなにすごい師匠さんの落語が聞けて本当に幸せです”等々……こうした感想のコピーをお礼状に同封して師匠に送ると、下記のようなメールが返って来ました。

“感想文有り難うございました。

うっとり読ませていただきました”

話芸だけでなく、その“人柄”に、私もすっかり喜多八ファンになりました。

“落語の深さ”を知っている人や“噺家の善し悪し”がわかるお客さまが少ないのをいいことに、口では文化を標榜しながらも、本音は営業優先のような……「この主催者は、ほんとに“落語”がわかってるんだろうか、ほんとに好きでやってるんだろうか、“噺家の気持ち”がわかってるんだろうか」……と疑いたくなるような落語会しか知らない我が故郷の人々に、短い期間ではありましたが、人情噺であれ滑稽噺であれ“落語の本質”とはどういうものか……“本物の噺家”とはどういうものか……亡くなる半年前の高座でも、文字通り命を削るようにして、見せて聴かせて体現してくれた“喜多八”を紹介できて、ほんとに、ほんとに、ほんとに、と三回書いても書き足りないほど、ほんとに良かったと思っています。でもほんとは、あと10年は佐世保に来ていただきたかった。あと10年は、あの笑顔を見ていたかった、あの声を聴いていたかった……。

それが叶わぬ今となつては、喜多八さんと親しくて、しかも佐世保の、この私たちの会とご縁のある師匠方と一緒に、喜多八さんへの深謝とお礼の意を込めて、落語の本家本元である東都からは遠く離れた西の端っこではあります。私たちが続けていること、目指していることを“わかってくれている人たち”と一緒に、追悼の落語会を開催したいと考えたのです。そのために、次回来ていただく師匠方をご紹介します。

入 船 亭 扇 遊：見るからに“いなせな風貌”といい、その粋で明るく品格ある芸風は、いつの間にか観客を江戸情緒の世界へ引き込む古典落語の名手。ある時、喜多八さんが『睦会(むつみかい)』の経緯を話してくれて、「扇遊兄ィが引っ張ってくれたんです。兄ィのおかげですよ。兄ィがね、兄ィが」と何度も何度も……。扇遊さんが、喜多八さんの悲報を電話で告げてくださいました。

林 家 正 蔵：高座に姿を現すだけで、会場を明るくできる数少ない噺家のひとり。大名跡である“正蔵”（九代目）を襲名以来、精進に精進を重ね、その優しくてあたたかい人柄から語られる古典落語は「着実に新しい正蔵の世界を築いている」と称されるほど。喜多八さんとの二人会を三回やり、水族館を案内したり、遊覧船で九十九島巡りを楽しんでもらったこともあります。レモンステーキも一緒に食べました。

桃 月 庵 白 酒：“とうげつあんはくしゅ”と読みます。「次代を担う30・40代の噺家のなかで誰が一番おもしろいか」という話題になった時に必ず名前があがるひとり。その愛嬌のある風貌と正統派の語り口で、現代的センスあふれるギャグを織り交ぜながらの古典落語は絶品。東の方で喜多八さんとの会があった時は、そのつど食欲や“声の調子”を知らせてくれました。

柳家三三：小三治を“親”に、喜多八を“兄”にもち、正統派柳家の噺をしっかりと受け継ぎながら、古典落語の王道をまっすぐに進むその真摯な姿、その確かな表現力は、白酒とともに「確実に次代を担うひとりである」と落語通の誰もが認める噺家。三三さんを佐世保に連れて来てくれたのが喜多八兄（あに）さんで、案内した鹿子前（かしまえ）の海辺で、“兄弟”並んでうまそうに一服、なんて事もありました。

春風亭一之輔：四年前（平成24年）に異例の21人抜きで真打に昇進するも浮き足立つことなく、さらに芸に磨きをかけ、その勢いあって小気味良い落語は、白酒・三三とともに次代を担うと誰もが認める逸材。私たちに横槍を入れるような会からの出演依頼を断ってくれて、その話を喜多八さんにしたら…「あいつァいいよ。若いけどそういう筋ィ通すから」。

他にもご縁のある師匠はいらっしゃいますが、日程調整もさることながら、経費的に私たちは五人が精一杯（苦笑）。で、今回はこの五人とやります。私たちの会には今回初めてご来場いただいて、“柳家喜多八”のことも知らない落語初心者の方でも、次回、この五人の高座を見聞すれば“古典的な話芸が、なぜ現代人の共感を得るのか”わかる……かもしれませぬ。

“生落語（ライブ）”の面白さに気づく記念すべき会になる……かもしれませぬ。本日の終演後に、そうなっている方も多いと思いますが。

喜多八を知っていた落語通の方にとっては……いや、それ以上に、こんな西の端っこにいながらも、喜多八さんのことが大好きだった方にとっては、思い出に残る落語会になる……かもしれませぬ。記念すべき会になるか、思い出に残る会になるかはそれぞれでしょうが、いずれにしましても、この五人の師匠方と気持ちをひとつにして、お客様方の心にトーンとくる落語会になるよう、努力も工夫もいたします。

最後に、落語家で初めて“人間国宝”に選ばれた“五代目柳家小さん”

（喜多八さんの大師匠）の……“心よこしまなる者は噺家になるべからず”という言葉を書き留めておきます。

私はこの言葉を、扇遊さんからお聞きしたのですが、そういう矜持をもった師匠方と一緒にやっている主催者としては……“心よこしまなる者は落語会をするべからず”と肝に銘じながら、これからも続けていきます。

こういう落語会に共感していただけるならば、一緒に育てるような気持ちで応援してもらえると、嬉しいですね。

本日の『瀧川鯉昇・春風亭昇太』両師匠の高座を見て、聴いて、“生落語（ライブ）”にも、私たちの会の在り方にも興味が湧いて、いままでの出演者について知りたくなつた方は、HP（ホームページ）をご覧ください。今後とも、『佐世保かっちえて落語会』をよろしく願いいたします。

（文責：海老原靖芳）

平成29年5月20日(土)・21日(日)

両日ともに

・佐世保コミュニティセンター5F

開演午後4時

◆ 一日チケット

大人指定席 :2,500円 大人自由席:2,000円

小中高生指定席:1,000円(指定席・自由席ともに同じ)

◆ 二日通しチケット

大人指定席 :4,500円

小中高生指定席:1,500円

※チケット販売・問合せ先

佐世保かっちえて落語会・実行委員会 事務局

佐世保市干尽町 2-5 観光交流センター2F Soup-Up させほ内

Tel:0956-32-0888 / Fax:0956-59-8151

営業時間：月～金 9時～18時

-----切り取り線-----

〈指定席希望者のみご記入ください。チケット販売は約2ヶ月前です〉

20回「入船亭扇遊・林家正蔵」

◆ 指定席 大人()枚・子供()枚

21回「桃月庵白酒・柳家三三・春風亭一之輔」

◆ 指定席 大人()枚・子供()枚

〒

ご住所 _____

ご氏名 _____

電話・FAX 番号 _____